玉川日記　四編　中

へ13
3188
8

へ13
3188
8

武拾它問屋

松下

昭和十
六月二五
購求

玉川日記四編巻之中

江戸　南仙笑楚満人作

第三回

前漢書に李延年が一くさび顧るば人の城を傾け二くさび顧るば人の国を傾く寧知らず傾城と傾国と佳人再び得る難しと歌ひる北方の美人の故事思ふに世俗に酒色の二つは身の讐家なりと今ぞ覚ゆ。知るとても情のなくてあらと人

術のるゑといひ。終ゐ夫婦となりにしる。お貫ハ深
次郎ゐ実を注くして天より言く敬ひつく私合眞
侘住居漏さぬ水ゐ恋のくれいく繁る園田の
里重る貧苦ゐ比ごろハ旱の苗の枯うる憂がる人
みも禍津日の神るらぬ身ゐ行末を按ばるして
深次郎ハ風邪の心地とそうち伏るゐ浦と思
難治の症便道なる身ハ沖白く船の揖取絶る
心地して欲きハまゐ真清水の涌出る汨とぞ

めゝ。「深さんどうぞこのまゝ。ゝへのお薬ハ
上ゝ怪くハどざんせぬる　深「ア、イヤそうもるいがの
飲まれ　「るぜめぐりませんエ　深「擋も美の刀で
斯病つうまてとまぐ経病治らうようもなかれ
思へば。兼て高くめくもの氏書簡ゐ其方の彼
未身の上も委〳〵頼んで母る所ハ中野といふゐ
黒虫屋の雛造ぎのといふハ美理のある私が伯父
夫ゝら内へ渡りもつけ。まぐ若い身ゝらの変

何所へでも片づけるから。右も左もして親しらみも。安堵させるやうにしてゐるや中途といふハ雑司が谷へゆく度ゞ硝子の「イヱそんな事ハ嘘ですね。お前さんなぜそのやうなふがいない事をいふ。云やりますと畢竟いへバ時の風から。引つゞいて病氣。なにもなくなれバおのづから病氣につれるやうな事でもあつく。其の容子とおもひながらも兎角に案じられるゆゑ此ごろお前さんいはねど辛い

近いことゆゑに湖の上の善所さまへ。日毎にまゐつて一日も早く本腹するやうにと。昨日は御鬮をとりまして見ましたれバ北一番の吉のみくじまで。それを力に全快して大切なお屋敷の宮仕への詮義をして親にさせの御苦難を免るゝやう一途と氣にかけてをりまする。どふぞ快くなつて下さりまし。跡で先祖もおまへ一人を力にするわたしが身ハ。どうして別まで只ひとりこの世に生て居られませうト ひざに泣つき しやくりあげ

ゑくらうのことどもなれ在斯折〻〻外の方に人の聖郷しけっすく。陸子隆〻そ洞頭をうくして勝手へ立ちれば。
奥へ入来る老人ハ風俗村の学者にて昔気質の堅祝父所ハ似氣なき学文好みて自ら覚えし
医師の業似つの人も知つもく追〻ハ藤治もこのまるくかどに漸〻ハ流行て今ハ並〻の医師ハ及
ばぬ位なる功者ハるまでの。ある藤家の人が晋ひるまくハ使を求めく頻〻くるまく先の日ろうこ
て業成めくけるが。今日もあるでく入来りて宇「い
うでござりまそ。ハ客辞ハ宇「ハイ〻〻〻同じ容
す子で宇「ム〻まづお脉をトる奥へ入り手ごのをこんてまづくくと
ひるどあらんせ宇「どうでござれませう喰も進まずぶらぶらと長引まづが宇「さあうサ原来只の風で
いるのハ眼眶が痛んで鼻が乾くハ〻〻〻夜も
眠らずぬとしろハ湯朋の症とこんこんとしが
ユ支をして柴葛解肌湯とりの業を進ぜとが。

まづ〳〵同じく積で愈ます〻う。マア[illegible]して飲せるさうがいく。まつ〳〵めの腋下の痛いのハ。めをハおり月とえるが。鬼角種く〳〵まつゞけゆハこまりまして。めをゞ発つくハ迚も難症らうが。まつ〳〵[illegible]すまバ。今の内どんべのサぬき「どつち早く治る仕方がどざいまさうら宇「さるふサ色く持こんざ[illegible]氣ぢらチトもまいがこゝゞ方に秘方の妙薬があるとハハアあるが物が掛つまらぬと。ぬき「それ

ハどういへお美ぐく宇「さるる書立ゆしてあるうち。そうちで買く用ひくゝんるが。いくゝハ銭のうくる美ハ自分で調合ハ高手なね。めつくゝんるる氣ざゝべ本ハ万屋へおそうら持く来く。うき立をしてやゞいろぬき「さるうサどつどそゝるうつく下さいませんら宇「そうさるアハア何のどうさるね人が。肝心の丸の物が三両ばかりずも入つまきるさうさア。ぬき「ハイ又それハどうしてもゝ金ゆへうくられません

うら　宇「そのともく。其氣でさくゆまバ急度
おゑを　あまゑうゑ。ゆまハ〜ゑめ〜てこんてこ法でぜん
て人　私どもの方のイヤ　ほく　まく　ゆ〜ハ高牛せう
トぐりそのく　跡ゑお貧ハ　おゑまゑれ。今ハ　ぜ三めん
ゆも　ゆ　ゆのうく　如何ゑ〜て三両の金　ゆ〜ハ。
ゑまをとらし　ゆゆまを。　まどゑせうゑ〜ゑ。
ゑの顔ばせ　ゆゆゑゆうゑハさゑぞ不度なる。
ゑ〜ゑ入ゑうハ家ゑの卒八とて不好〜ゑぷりの自

腦男　ゆもうゑうゑゆ好色ゆゆうゑて。お貧が媚く
きゆ首丈ゑゆうて六神をぬゑし。いゑゆも口説
落きんと。種ゑにゑをめぐら〜。先の頃より
取ゑけて万事世活をゑゑうけゑぶ。ゑを思ゆ
五月蠅ゆうて。お貧ゆ　ゆ中をゑうゑゑ尽
ゑく口説ども。原来貞ゆの女なれバゑて羅く
氣ゑもゑく。ゑうて強ゑくいゑゆたれど。猶
懲ずゆつきまゑうゑ。ゑゆも外の方にゑびゑ。

其人もなたさまに。染次郎ハ眠つて居ると思ひ
ながら卒「イヨウ梨花一枝春雨を帯たりッ。どう
みても美しいものだ子コウおねきさん撫なさん
な茶でも呑ねへ。時に親指ハあんべへがよくで
ござへせん。ねき「ハイ有がたう。少しハ好ござんすで卒「ムヽ
それまでもよしト。そこで眠ッて居ねまうてよし〳〵。
コウおねきさん。どふしてものだ是ほど聰て居る
ものを其様に憎がつてくんなさらねへでもよからう

そうなものだ。ハテサそんなこたアどうでもよくサ。ところ
も原ハ腹からの。ナニまんざら芋ばかり喰つてく
育つた田舎人でもござへせんシサ。葛飾の水を
呑ましたので。洗つた奥ござんすヨ。何もそんなに物
を思ふせくくんなさることハのヨ。ハテサ若い時
ならア色恋も是サすこしハ古人の狂哥にも
んぐの四深切ハ。またた有がたうございますが。
ござんす其様な事をしてハ済ませんから。其なら

又卒「何をいふと思へば お宝ものの役切殺ぐ。
ムシおりしくもねへ。そもサそんるさらばといふて外の
新しのまるものゞ。此村の中ゆも有うといふのゝ
ぬき「ぞへいさしておまへさん。江戸ッ子でむいたゞまろ
つて実ぞ。おまへさんるどゝ。しん美の通人といふのでござの
まへものと卒「コウ何もおつる本漢をしたくん
るゝらばゞともの支じやゝねへゝ。ヘンあんまり安く
あてくんるさるる親もねへ子のやうに ぬき「ゑ宝ま

女郎のるの おかゞと殺めうらそんぐで居ま
たヨまごゝら私るどのゆうるゆめへ。おゆうぐんは
おつしやつても。おあるゆにはそも 卒「有うと謎
ぬとゝ はるぐ何もうも面倒ぐ。一番早いるぶ
いぐぞしてくまるのぐ否とも癪ともいくる
せへ。こちやゝるまるる言ねへで。若い男さらの者
が。さぞ風流して難義でめらうとおりゝうら。
上るせうをしてゆる氣ぐ。まゞといふも払ぐ

を運ぶく江戸を欠落し。爰へおちついて時。
が房に取立さるべの苦労をして今八入ひとと
るう。若いのの取立もるべく人ぶも重んじられる
江戸の欠ぐが取も幸す知つぬいて居るるら男
ふはなされてうとれそうゴヨ爰ぐらら先とる者
物しぐが。金ぐ貸さのが二分に手ぐ二度。
それ又千俵又百ゥ世三百ゥ世八いく変ぐ知れぐ。
家ちんハぬでたまるくある。茶ぐ又外ぐ三度味

学ぶ薪ゥ色く食せる江二両の取ハ先月の
内とてあるぐらとハ奥ぐあるバとるの金。
りちやう何ゥ悪の後まるぐまでも仕傷ぬ
実ぐ入まく世話をするものが有ゥぐぐゥ入
れふはらけれバト。義太夫本ゥもよくあるぐ。
コウけゥハ是非極ゥと扶扶を使やちやうヘン
動ゥ側ゥぐゥ　ゆき「まゥとに色く厚へお世話ゥ
ゥく。はのぐんハぬでも忘れハいゥ世ぬ爰

中をも　卒「とるとる〳〵。野暮な未通女ら何ぞの
ものに。ソレ黄八男の一人や二人あるとるとる取めろ
うそナ。ソンなすりろ可悦く殺しとめくるれの果
おやろねくろるんの人を。ヘンまぜろけくされちやろ
居やせんぜ。地の藏の顔も三度ごろ。素純嚴漢の
者を相手にすると。そんるる夏ハ言ひるせく　ぬき「十二
まぜろけくすの何のと。あるとの方るお並結コ放
まれめを。外の夏とらか何い皆きませんけれ

ぎも色だろりハ　卒「るるるやせんろ　ぬき「あるとこと
若い元の上ハ人ハ教ハまるお方が。
そのやうるる理をうやお腹をお立るとのまるた
夏主あるものゝ不義をあるけるハ云理ぐ
どざれまるやうまを。存るの方でハあるまるく。
四ぐ理をあるしやるるとりくハ　卒「ろ素人が石口
を秘やるれ強勢ひねるる此ろが理屈でるるの
久。そんるらぎでも否とりくのぐナ　ぬき「ろる其

事ハ卒「ハ〳〵本氣ゐるうてあつくるるうら不
便ぢ。そつやアそのとけの来さのハ初いのコけぢ。
急ゐ此家ぢ入用といハい。ゐ使を源居させるつも
つごけまどもひいるてきぢ出多わへうら居い
ゐ喰ことをされるだうりで入ちらぢ有ませんぢゐ
よつて普請と入まるといの第ともいろわへうら。
妾へ當分逗つのりさまぢうら高中うとうそう
だぢ。この比家を明てゆらハゆやアるりやせんまつハ

今迄の貸紙耳をそろへて勘定して。早くゐ妾で
ゐんる女人トりうまそぢろへうりつへる腐の況吟
ゐふきぢる戸をひらき子ぢ「アイおじさんやアイ
宇市さんが此書付紙よこ〳〵ヨ「アイあつこ
ぢけ。モシよろしくヤて下さいまート何
ゐりを深次郎ゐも其るを卒「アいぢ逗晩ゐ
來やすう。ちつこ〳〵ハおめくのをひろぢるゐも
深ころゐいろねくぢもさのーそのぢやうるーしう逗

ゆへ女のアリやいづれ晩わめくり申せう。マアそうく
正勘弁して挨拶あるべき人申。マア早急といへでも
るれうら晩ゑ吹申せう。どうぞ簡よろしちやアえの
貸いものゝ今差つくこと事でもあまべ又ともう
くもなりそるるものまぐとりて跡で取ふのえん
のといへのじやアねへ金とりよ〜よに酒ご清ふり
まで〜又のろの白を出して何らまあ程せ
ぶ蔵やアねへが美〜しのぜ。うつも顔さへ水樽やッ。

ホン三一仲節をちうと教へさくんるせへ習つぜわん
ゆへアイすんるらト「ホン三何の関係ぐ
ぶ拵る貧苦ホ逼るその上ホ入ホ云様ることを
ゆられぞ〜こ前生のヲヤト〜ぞ〜三両
あまりの金家新食〜と大家さんの借をする〜人
を拵んで言訳を〜病氣の治るまで長へあらへ
ゆうホ五つこ所がその金ハト按じ入る表のこ
「ハイ山岡物ハ中手ハぞ〜ま世ぬ〜ト

ねぎ「ホンニそのとおりアイちょっと寄っておくれト内へよび　きく
んざーを一ッ買ってお呉ぐるのろ　少る毛「ハイおうんを
ろうございます。何でござりますか　ねぎ「銀サ　少る毛「ハイ畏
頂きましたーまそうが當時銀ばかりまーしてござり
まーて。へイ。何ぐござりますか　少る毛「お取うくゆるさの
ますんろ　ねぎ「マアりんそおくれト　ぎんざーを　少る「へイ。
とまたハ大造る。モシ是ハ大そうるものでござりまそ
ね。如何さまとれハ重くてるりますんろ　さとれハ

大きそう是ハ本ものるまバトいろいろきーとを　少る「氏
ぎくの　ねぎ「ハとうとうとけ
菊ハ金ばかり遠ハござりますんが　お金ぐいりそうるる
わるるが　少る毛「ハ
ろぐん　ねぎ「ホントおるりますか六十八銭
六トでござりますから。モシ是をおもたしと甲斐一ッ
ねぎ「ハエよ
ちゃ取るるこのますんろよいものがござりますか
ぐ　ねぎ「ハエよ
敷亀甲ばかりでハござりますんが。何るら小さい芋を
一ッ取ますそうトこれまりいろくもきーとうんぎーのちのとれどもきー。
ろう久のつりにて金を三銭五厘ときそ銭ときろ。

第四回

斯くまでに身わつきて大切なる。彼藤蔭の筆跡
くてはなるまじく思ひ。売のとりかへすと。ふたたび
やすくて売ならひ。それ彼小関が手紙を見て
ふ自ら男髪の髪をくしけづりて中をそろて
切くく売ければ。その價金ふくみ分ふく形合二通
余の金紙ぬすうしなばゆゑ。ひそかに深沢部が同意し
風をうかがひ家をうり借金を償ひさるくことを物
がくて又某の書立をもて金をくにおくるわざ。

深沢部がその妻ひと感じ入り泪先ぞうをうり。
此度は同くの看人浮くるに係は賜ぬ。ぬすまで一世を
隠くとあれ。さそもに二人の名を表するわいとも
せんくこれば。先我が余の金ぬくい家まで一両
もこれを盗ぬ。その因をたずねば逆角人捕ひて源を又
借りまつ未ぬくす円をもて三分ばかりわく某を
求め用ひてこれをいつくまらん。そは三両のをひ新を
数をの三分ぬくいはくまるとあるなど。風蔭の

字「ぶのゝ相撲」。右も左も明朝の事。けゝはこそ日も暮くれぬと。駕て乃駕こそ深夜郎八拍をして其後おゝ代くらべ。あゝ八あゝしのちんこどもと。袈裟ゆ系とり車とり。別るゝ早死影の風「おのゝ八浅系の浅くるのよ。おゝ前系深さ八去きぬ系。うゝ八ぢうふさぐ関屋や格のこれへく。ぬゝ八早くも秋風ゆ。きりぐ秋系ゆ前系。系八候ねど中のよさたくゝ小夜戸を明ゆ八格のこれへく

「涙八敷ゆ系涙のぞうけんもゆ系人ゆ系。おくまくるらぬよの中を思ひまゝ世ばゝ格ゆ。そさへくゝ川妻ゆ墨ゆ系血の涙さへ落とひて排ひうねる拝ゝ郎八頼系。深沢郎八頼系。冊へ苦しむ妻ゆ氣落とむろり車も綿ゆ系。てゆゆらくとり資中ゆ。ゆ絶しく頼ゆ生。ゆ。「深沢郎さん。痛ぶ。深「イヤ格ゆ。悪のとりゆでゆアイタ〳〵。コレ貫あんじて長ゆ。

ア何の因果ぐひありきるるぶいるる身の上とも。
其方はよくもあのそのもつてさて。深切わしそ
れ。あるてアイヤ〳〵うとーげけるぬ「まこ側の
癖ぐことーわれをるんのまアあ〳〵とまりこ。
のよくそんる良くうるらぢをいみて下さんする。
麦飯めんでよいう人トひとのまアるんだらのまアそぬき「こ
ひやあせるぐれれつたるれる
よひは熱も格別強の女うで見ふそうやら動猫が
するまうでコレまアこれ家れ。あいるトとひぐうる良代
のちこまきぐうと

きくうあをうあをうあをきのぐうり深「アヽもよいうるーぐ氣毒でまこそる
うすをきのぐうり
たが頃ひも考てくるーね。アイ多〳〵トまをうーうちをを
ぬきまうくうり
ぬきまうこうんをーぐをーうすを
をるるめいとぐをうれそ
悪のとうも容子がるるのよよーく。ちーうと宮一さん
ぐ蕎麦ふ居るでめうよう「一走り行く形んで来
てうんそのらるるでーどぎんせねう。アく見ふつけそる
まこく一人彼ふぬるめるけ見バ砂で看病
する人もるー。とふ内もひまぐ入る。アヒぐんく歴れ

母さん○モシヱく　たびれましたら下さいまし　ト　息をせき
郎ハ是にて安堵し。どちらへんとその恩義くひあがれどもちかきの。まつして
今我ハおつ詮かたく。どうぞんだとハわうして自分のさきたるまるそのもの我れ
おねぎハ申すべき様か一たびちよきのわらくろうしやとへのぶ久しきの深
次郎ハもうたんぢくのる悪くようでんるめろる一つ音もなきのきつぐ見よ
うろとこうくあつて是も承のがえてあ一声を甘
りこうなてなそう一ハ二たびんるのるもりのまなり
様ばつて若しき息を吻き　深「ヤヽそれく　おねぎ何も案
ずることハない早く　くうちへ安心しやつ一寸のんで
来るくるやれ。どのもまの母さんでハ気ね　ねき「サアちよつとても
それおもつて来りくるとハ思ふれど此様子でハ　深「それ
のく。たとへ命をすて居るとしても○粂「医者の代
りハ為らぬ。さうして早く○おとせ「遅くなれば後悔しても及ばぬ
悔しくね此経病　ねき「アレどうも兼しらまする事を
そうでなんであるハ何ハともあれ一刻も○お「ひとく気の毒
せうろらちうとの内うるらず。かうなら兎角気をつけて
お待く居て下さんせ。コレ白湯も枕上に汲んでおくと
ぞへ。ドレそんなら蝋燭も点し　暗くとも四つ下か五つ下がるか
泣く泣くもうろうト　うけ出してハおけのあすまき云ふにハ見せるぞり
あとに残りてむかさんでもんどうでらひめる悪いを

なが。かくてハ　たやすくまらなんだ上きみがしつ。ゑさぞこちらハ
がらくなるうちあうとの男の上へおぶさりなきうなきのものと
くらし上わき寄つ　よし　おぶくりととをさせ　寒ひ僕の奴あるを重衣
とおぶてくれろきんおこともやをわねね
奴と婦るらつ者り。　お甞ハいもをて爰を走る時なれ
よもなくバ後面より　ぎうと抱きさえどむるものあり。
ねき「モシぎるくら何をなさいますも爰まで来たセトふりむかるれバ
さぞきらるの大男ハこれべつどんなどず卒八なりぱおおきな
あまうるさやと身をさけてふげしとするをうずうさすりとこまる迹を
ありくと奴さん　おびの　卒八「コレサお甞がうそうそくこんなくこのハ
あさうぶいぶ蔵え人　すぎぞ来し。あそうぜんど
神のミわ合せ。コレ此上の松林ハ禅禅寺のうちの辺

顔暗え八なくらし人ハうちらコレサちょつと見ひ　たもとに
ござくくるる一卒八さんどうぞ隠まして下され
甘肉が今病氣がまうろく迚も助るまいかと
くらいの者すゆゑ。なたのんで哥使の者も探きく
病人をのこしてお奴一トもより医者を頼のお渡ひよ。
ふりても居るところでござりんす　どうもモウ死んじられでうう
いそうちも　卒「コレ病氣が重いのうなのこともおそれ
ゆげもろくなそもそうハなうらねト　おのれの詳ハきもいかふやうに

ならずや。此の死骸を大川へながさんとひきずりてせんすべなく。西の方を見やりて
引つくへうしとの古き一本の。杉の太木の蔭にまぎるる人影も。ありてそのあとを
おまへさんがたのあかり 潜る所に来かかる 挑灯女のさしかざす
見あらんとす。どうろ此やと縁りき見ゆる火を吹消し 木蔭に動悸を
せわしく。
見さだめて。ぞうりも蹴上げて辛八 猫怪変 卒「コレサ おくびからの
ゆめ通りになつくさや ねき「イエ どうあつても ここで ご
ざんす。卒害しておくんなせ 辛「何も数を程の躍す。
まゆめ通り 深夜の門が 実に寂し気が まつてるならば早
くおれがゆめるを使くなら 内へ這のぞ付そてや

次郎八室ぬて今は八生で八迚も 居ますまいの
ト 卒「それならかねて 仏を程まる金銭揃へて 今返す。
ねき「アイそれも 綱へて 寄ましてれば 内へ入門で直ぐに 卒「アイ ゑ
内はめる八 當ゆるならぬ 深夜 一文も 角上 ねき「イエ 実に
綱へ 一殊に 学人もつて 私が 仕舞て 来まれば 卒「イヤまそ それで
先揺ねえまでも 非でもそれまへらつて 八泣ても つまぬ
めへ 叶らぬ 逆めるに 半も 解てと ト いはれくらふ 本当より 恐ろしき たる 大男 辛八が 禮をし 気をみよ
あるめるを 三間ら ひきさきて るげつくれば おねきは びつくり 気をかける どうーま
本のるをのれば 月にも あとを めしまれば 早むきの さて ものもて 落たるを

[illegible]

又年八めが例の癖で卒「祝分」[illegible]「[illegible]」[illegible]

来来く〳〵あまをうく人者「[illegible]」[illegible]方へドレ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉川日記四編巻之中終